

戦前期タイ国の日本人会および日本人社会： いくつかの謎の解明

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授
村嶋 英治

はじめに

本稿は、明治期から第二次世界大戦期までのタイ国における日本人社会およびその団体活動について、従来知られていない事柄や曖昧にしか判っていない、いくつかの事象を新しい資料を用いてできるだけ解明しようと試みるものである。

この時期の日本人会の活動については、タイ国(泰国)日本人会創立50周年の節目に、泰国日本人会『創立五十周年記念号』(東京、1963年、136頁)が刊行され、その後、70周年、80周年、90周年に、『クルンテープ』の特別号が発行されている。

また、タイの日本人社会については、石井米雄・吉川利治『日・タイ交流六〇〇年史』(講談社、1987年)がある。同書の第二部は明治期以降の在タイ日本人を比較的詳しく扱っているが、細部に不思議なほど不正確な記述が目立つ。一方、テーマは限定されてはいるが、香川孝三『政尾藤吉伝：法整備支援国際協力の先駆者』(信山社、2002年)や松本逸也『シャムの日本人写真師』(めこん、1992年)は本格的な調査の成果であり、解釈には賛成できない部分もあるが読み応えがある。

戦前期の日本人会の歴史は、もし現在の日本人会が戦前期の文書を所蔵している

ならば、それに依拠して比較的容易に書くことができるはずである。ところが、日本人会には、この種の文書は何ら残されていない。また、1930年代前後の日本人会は1~2年に一回の割で、合計10数号の会報を発刊しているが、公共施設や個人の所蔵として、保存されていることを筆者が確認できたものは、7号(1936年7月15日発行、ガリ版刷)、8号(1937年5月1日発行、神戸で印刷)、9号「アンコール特輯号」(1938年3月1日発行、神戸で印刷)、10号(1939年9月30日発行、神戸で印刷)、11号(1941年3月20日発行、神戸で印刷)の5冊に過ぎない。



泰国日本人会会報第11号
(1941年3月20日発行)

加えて、在タイ公使が本省大臣に宛てた

日本人会創立に関する公文の報告書も存在していない。それ故、1913年9月の日本人会創立の模様も判らないし、1910-30年代の日本人会会長の氏名さえも数人分は不明か、間違っただけである。

第二次大戦における日本の敗北直後の1945年9月、当時の自由タイ政府は戦勝者である連合国に代わって全ての在タイ民間日本人の財産を接収し、また全民間日本人をノンタブリー県のバーン・ブアトーン(Bang Bua Thong)収容所に強制収容した。1946年2月時点で、3400人ほどの日本人が同収容所に収容されており、この内800人前後がタイ残留を希望していたが、英軍の厳しい審査により許可された日本人(台湾人・朝鮮人を含まない)は146人であった。彼らは1946年9月25日に強制収容所から解放されたが、制限の多い生活を送らざるを得なかった(村嶋英治「日タイ関係 1945-1952年—在タイ日本人及び在タイ日本資産の戦後処理を中心に」、『アジア太平洋討究』創刊号、2000年)。このため、明治以来培われたタイの日本人社会は根こそぎ失われた。

戦後、日本人会は1953年10月8日付けで、タイの国家文化法第14条に基づき協会設立の登録を申請し、1954年2月23日付で許可を得て、正式に再発足した。終戦直後の在タイ全民間日本人3603名の強制収容(1945年9月半ば)、その大半の日本人の日本への強制送還(46年6月16日)、更に戦後

再建までの8年間のブランクなどによって、日本人会や在タイ日本人家庭に保存されていたであろう、日本人会関係の資料や情報は消失したのである。それ故、戦前の在タイ日本人会や日本人団体の歴史資料の多くは、現在の日本人会以外から求めざるを得ない実情にある。

戦前の日本人会・在タイ日本人社会および日タイ関係に関する、筆者の収集作業は、いまだ途上にあるが、本稿では、上述した先行著作とは、できるだけ重複を避け、別の資料の紹介に努めたい。なお、筆者の資料収集が完了していないことに加え、本稿は紙数の制限もあるので、全ての期間をカバーして通史的に記述することは不可能である。本稿では、一般には知られていないこと、あるいは知られていても事実とは一致しないので訂正した方がよいと思われることを中心に取り上げる。クルンテープ誌2010年7月号より今日まで筆者が「バンコクの日本人」のタイトルで連載している原稿も、同時にご参照頂ければありがたい。

なお、本稿では敬称は全て省略し、敬語表現は使っていないことをご寛恕願いたい。引用文中の[]内の記述は、筆者による修正、追加もしくは説明である。

日本人の来タイの始まり

明治になって最初に来タイした日本人は、大鳥圭介、川路寛堂、河野通猷らの一行であると思われる。彼らは、1875(明治8)年2

月-3月にバンコクに滞在した。日本、清国、暹羅の三ヶ国を兼任するシェッフアー・オーストリア弁理公使が、1874年12月16日に明治天皇に信任状を捧呈した後、チュラーロンコーン王に信任状を捧呈するためにバンコクに向かうに際して、日本政府の依頼により弁理公使一行の船に大鳥らが便乗したものであった。大鳥らは香港からオーストリアの軍艦フレードリヒ大公号に乗ってバンコクに入った。大鳥らの訪タイ報告書は、『暹羅紀行』(工部省、1875年8月刊、暹羅紀行と暹羅紀略(上・下)から成る)として名高い。

日本の民間人で最初の来タイ者は、外務省の旅券下付表で見ると、1884年に別々に来タイした、本間伊喜蔵(34歳、新潟県平民)、和田松五郎(31歳、富山県平民)、大鞍楽之助(55歳、神奈川県平民)の3名である。本間と和田は、アーネスト・サトウ駐タイ英公使に雇われたものである。大鞍も被雇用と記されているが、誰に雇われたのかは明記されていない。

これと同じ頃、当時醜業婦と呼ばれた日本人女性たちもバンコクで営業を開始したようである。彼女らの存在は、1930年近くまで確認できるが、バンコクの市場規模が小さかったためか、あるいは別に大きな供給源があったためか、多い時でも20-30人前後に過ぎなかったようである。

タイ外務大臣テーワウオン親王一行が来日して、1887年9月26日に『修好通商に関

する日本国暹羅国間の宣言』が東京で調印された。続いて翌年初め、この宣言の批准書交換(1888年1月23日)のために、パーサコラウオン大使一行が来日した。

パーサコラウオン一行の任務は、批准書交換だけではなく、日本の教育、司法、軍事制度の調査も兼ねていた。

1888年2月末の帰国に際し、パーサコラウオンは、6名の日本人を同行した。東京鎮台給仕の山本安太郎(1872年6月生)、名古屋の山本銀介の2少年、真宗大谷派(東本願寺派)僧侶の生田(織田)得能、真宗仏光寺派僧侶の善連法彦(よしつら・ほうげん)および、日本で入手した2頭の馬の世話係である宮内省の馬丁などである。

パーサコラウオン大使が2少年を伴って帰国した理由は、次のように報道されている。「暹羅国大使：同大使が此度雇入れ帰国の節連れ帰へらるる福島県人山本安太郎氏(十五年七ヶ月)は目下大使の各地巡覧にも同車して随行し居る由なるが同大使が我国の子供を雇ひ入れたる訳柄と云ふを聞くに帰国の上座右に召し遣ひて自からいろはより漸次日本語を習はるる為めにして又山本氏へは大使自から英語を教へらると云ふ又其雇入れ年限は五ヶ年にして月々六弗を給与せらるる約なりと」(東京日日新聞 1888年2月5日号)。

生田得能と善連法彦は仏教研究の目的で同行した。生田は帰国後、タイ仏教に関する日本人の最良の著作とすることができる『暹

羅佛教事情、附生田得能自伝』(真宗法話会、東京、1891年、全103頁)を書いている。

1890年には、三重県出身の建築技師佐々木寿太郎(ひさたろう)が来タイし、イタリア人の建築会社スワラト会社(Suvarato & Co.)に就職した。佐々木の詳しい経歴は不明であるが、彼はタイで正業についた最初の日本人であると思われる。1892年7月に来タイした岩本千綱(高知県士族、1858-1920)や1894年6月に来タイした阿川太良(山口県士族、1865-1900)らは彼の世話になった。佐々木は邦人中の人望家であったようである。彼は、1910年5月23日にバンコクで死亡した。

佐々木来タイの翌年、1891年末には20歳の製図士、田山九一(香川県高松出身士族、1870-1941)が来タイし同社に就職した。田山は、その後タイ政府の内務省(後通信省)の技師として長らく在タイし、1924年に退職後帰国した。

1890年末には、名古屋市の桜井鉄次郎(40歳)がバンコクに商用に行く目的で旅券の交付を受け、1891年末には東京の二村圓助、後藤彦太郎、宮崎国松がバンコクに建築業調査に行くために旅券を取得している。

1892年5月には、野邊地久記(東京府士族、1860-1899)がタイ政府の鉄道建設事業のために雇聘され来タイした。彼は1882年に工部大学校土木工学科を卒業した鉄道工学の専門家で、来タイ前は九州鉄

道技師長、帰国後1894年から早世するまで東京大学の土木工学の教授を務めた。

1892年8月にパーサコラウン文部大臣は、3名の日本人版画師を3年契約で雇用了。すなわち、嶋崎千六郎(天民、1856年3月生)、大山兼吉(翠松、1864年5月20日生)、彫工伊藤金之助(1867年8月29日生)である。嶋崎天民は、合田清がフランスから木口木版の技術を持ち帰る前に、独自に見様見真似で木口木版に成功し、1885年に精巧な木版を『絵入朝野新聞』に掲載した人物である。

上記3名に1894年3月には、印刷工樋口二郎(1868年生)が加わった。翌95年、伊藤と樋口はそれぞれ肺結核、赤痢で死亡した。1910年頃まで、バンコクの衛生事情は極めて悪く、来タイ後、数ヶ月も経ないうちに、コレラ、腸チフス、赤痢などの伝染病で命を落とす日本人は少なくなかった。

1888年12月に陸軍中尉で陸軍を去った岩本千綱が、タイの土を初めて踏んだのは、92年7月である。岩本は、在タイ半年にして早くも93年1月には、同地を発ち、2月17日に神戸に帰着した。彼の目的は、佐々木寿太郎らと共に、タイで開店する予定の秋津商会のための商品買い付けであった。同時に、岩本は、新聞記事や講演会で、タイ事情を紹介し、またタイのスラサックモンロー農商務大臣の支援を得ていると称して、日本人のシャムへの農業移民を唱道した。また、自著『暹羅探検実記』(興文社、東京、

1893年10月16日発行)を刊行した。岩本の広報活動もあって、この頃から、タイでの殖民あるいは諸事業に関心を有する日本人が増加した。

1893年8月に岩本はタイに戻ったが、恰度同じ時に、石橋禹三郎(長崎県平戸出身、1869-1898)が来タイ。両者は、意気投合して移民事業に奔走する。

岩本・石橋の勧めにより、1893年12月から翌1月には、津田静一の実弟、熊谷直亮(熊本県士族、1863-1920)が移民地調査のために来タイ。彼らは、文部省雇いの日本人画工4名らと共に、文部大臣パーサコラウン邸の一角を住居としていた。

1894年3月-4月には、斉藤幹シンガポール領事も移民地調査に来タイ。斉藤幹の来タイには、稲垣満次郎(1897年3月初代駐タイ公使、長崎県平戸出身士族、1861-1908)もシンガポールから同行した。同年5-8月には、日本吉佐移民会社から派遣されて鈴木錠蔵(茨城県士族、1869-1947)が、同じく移民の可能性調査に来タイ。同時期に山崎喜八郎(長崎県諫早出身、1867-1912)が商況調査に来タイした。山崎も石橋もアメリカに長期滞在した経験を有していた。

バンコクで日暹協会の結成

山崎喜八郎は、来タイした1894年5月頃のバンコクの日本人社会の様子を次のように書いている。

「予が始めて当国[シャム]に渡来せし当時に於ける盤谷府在留日本人の数を挙ぐれば男七八名、女未詳(凡十数名)之に予が香港より同航せし四名の男子を加ふるに過ぎざりしなり其後予が滞在中前後相踵[ついで]で渡航せしもの六名ありき。惣じて当時日本人の住宅として一家を営む者は女子三戸何れも淫を囂[ひさ]ぐ醜業婦なりとす、男子は別に一戸を構[かま]ゆる者なし則ち或は文部大臣[パーサコラウン]官宅内に寓するあり又は他に下宿する等其他種々なりし、而して予は友人岩本千綱、石橋禹三郎の二氏と共に現農商務大臣[スラサックモンロー]の旧邸内或る一屋を借受けて之に住し名けて暁鐘庵と称し日夕東洋の大勢を論じ興亜の経綸を説きて長剣空しく匣中に鳴りしの感なくむばあざりき。当時在留日本人の職業を大別すれば暹羅国政府雇美術教師(彫刻、絵画)に大山翠松、嶋崎天民、伊藤義正[金之助]の三氏通弁として山本安太郎、山本新介[銀介]の二氏建築師に佐々木寿太郎、田山九一の二氏、総て是等の人々が新渡来者に向つて種々の便宜を与へたること実に少々にあらざる可し其他有志家あり医師あり語学研究者あり又は単に視察の為め渡来せし者等種々なりとす」(山崎喜八郎『凶南策実歴譚』、鐘美堂支店、東京、1899年、15-16頁)。

1894年に入ると、岩本等はスラサックモンローの旧邸バーン・サーラーデーに移り住み、この館を暁鐘庵と称した。来タイし

た邦人の多くも、暁鐘庵に住まった。日清戦争勃発に伴い、バンコクの日本人は1894年7月26日に暁鐘庵で、戦争勝利を祈願する大会を開催。「同夜会合せし有志者は石橋禹三郎(長崎)、松野恭三郎(同上)山本安太郎(東京)佐々木寿太郎(東京)島崎千六郎(東京)田山九一(香川)大山兼吉(東京)樋口二郎(愛知)山崎喜八郎(長崎)鈴木錠蔵(茨城)松田惣一(東京)の11名にて此他疾病事故等にて欠席せし者六七名」(朝日新聞1894年8月24日号)であった。上述2引用から見て、1894年半ば過ぎの在タイ日本人は、醜業婦を除けば17-18名というところであった。

さらに同年8月26日には暁鐘庵で、6-7名の日本人が会合し「日暹両国間の親和公益を謀り併せて在留日本人の保護団結を主とする目的」で日暹協会の発会式を挙行了(前掲、山崎喜八郎『凶南策実歴譚』)。

日暹協会は、在タイ邦人による最初の団体であり、今日のタイ国日本人会の源流であると言うことができよう。当時岩本は、移民募集のため日本に帰国していたので、日暹協会創立の中心者は石橋禹三郎であったと思われる。1894年末に岩本が連れてきた第1次移民団32名との契約では、来タイ後当初1ヶ月間は、日暹協会が移民の生活上の面倒を見ることになっている。

1895年3月頃から滞日中の岩本と、1896年初に帰国した石橋は、東京でも1896年9月4日に日暹協会の準備会を発足

させた。

バンコクの日暹協会と東京の日暹協会の関係は、「日暹協会」と題した九州日日新聞(1896年7月22日号)の記事に次のように述べられている。

「従来暹羅国に縁故ある岩本千綱、宮崎寅蔵[滔天]、益田三郎、山本安太郎の諸氏及び目下我国に来遊中の暹羅人ウオム氏等は今回東京に日暹協会(社交的団体)を設立し遙に盤谷の日暹協会(同地居留本邦人の社交団体)と気脈を通じ大に両国間の通商其他に便宜を与ふる趣きにて現に其順序方法及び規約等に関し調査中の由其組織方法の成立するを俟ち広く朝野名望家の賛同を乞ふ筈にて暹羅に於ては同協会にして成立する暁きは皇族一名並に二三大臣其他朝野の名士数名は直に入会するの内約整ひ居れりと云ふ」。

更に、東京の日暹協会準備会の様子は次のように報じられた。

「日暹協会の集会 一昨四日午後二時より日暹協会並に有志諸氏愛宕下青松寺に集会し岩本千綱氏は暹羅国事情並に協会設立の趣旨を述べ石橋禹三郎氏は同国僻陬の景況を話し終て主唱発起人総代岩本氏より発会式を挙る迄の世話人を左の十三氏に囑托せられたりと云ふ 高橋與市 河合萬五郎 穴戸集太 武井忠五郎 安田勲 村田峰次郎 大野保四郎 小林樟雄 原治三郎 菊池謙讓 鈴木巖 井土経重 富樫吉二郎」(国民新聞1896年9月6日号)。

96年10月には岩本はバンコクに発ち、東京の日暹協会は、結局準備会止まりで終わったようである。

明治28(1895)年の在タイ日本人

さて、話をバンコクに戻す。明治28(1895)年1月4日に、ワチルナヒット皇太子が早世したが、その直後、チュラーロンコーン王はイギリス留学中のワチラーウット親王(後の6世王)を皇太子に立てた。1895年1月28日付けで、在タイ日本人12名は連名で立皇太子のお祝い文をテーワウォン外相に提出した。12名とは、建築技術者の佐々木寿太郎と田山九一、タイ文部省に雇用中でバーサコラウォン文部大臣邸を住所とする画工4名(嶋崎千六郎、大山兼吉、伊藤金之助、樋口二郎)、それにスラサックモントリー邸(バーン・サーラーデー)を住所とする大谷津直麿、石橋禹三郎、松野恭三郎、辻秀五郎、三谷足平、武藤(ぶとう)美一である(タイ国立公文書館Ko To.9.5/1)。

松野恭三郎は、1875年半ばに平戸の士族松野太郎の三男として生れ、1894年3月8日に東京府から、暹羅語研究に渡航する目的で旅券の下付を受けて来タイした。

辻は1871年末に長崎県で生れ、1894年末か95年初に来タイしたばかりであった。1904年ごろまでタイで商業に従事したのち、蘭領東印度に転じたようである。武藤美一は1877年に佐賀県で生まれ、辻同様来タイしたばかりであった。横浜で働いたこと

があり、少々日本語にも通じ日本人を妻とするデ・ソーザ(マカオ生のポルトガル人、英国籍)が1895年1月に来タイして、同年8月に怪しげな出資金を集めて「日本暹羅銀行」を立ち上げ、半年も保たずにつぶれたが、武藤は、この銀行の事務員であった。

三谷足平(1860-1924)は、弘前藩の御用刀研師の家系に生まれた。父の三谷仏句は、津軽の著名な俳人である。三谷は父親の俳友である藩医(近習医)北岡太淳のもとで医学修業を開始した(『大浦山誌』、海蔵寺住職花田正道発行、弘前、1944年、24-25頁)。三谷は、21才2ヶ月時の1881年6月に医師の開業免許を取得、陸軍の三等軍医に採用され、仙台の第二師団に属した。その後非職(休職)となり、1887年4月には東京に上京した。そのまま多分東京で医業に従事していたと思われる。日清戦争の勃発により、召集準備のために休停職及び予備将校について調査が実施されたが、1894年8月に予備陸軍三等軍医三谷足平は無届けのまま行方不明になっていることが判明した。善意に解すると長期間休職中であつたので何らかの手続きをする必要があることを認識していなかったのかも知れない。彼は召集に応じなかったため、最初の罪に問われることになった。即ち、「明治二十八[1895]年十月廣島地方裁判所に於て充員召集不応の件に抛り輕禁錮二ヶ月の欠席裁判」の判決を受けた。もし、日清戦争が勃発しなければ、罪に問われることもな

かったであろうが。

この間の事情について、宮崎滔天(寅蔵)は「暹羅殖民始末」で次のように書いている。「氏[三谷]は青森の人、曾て身軍籍にあり。私に脱して清国上海に入り、醜業婦を妻として医業を営む。日清の衝突起らんとするに際して、政府は一片の召喚状を發して彼れが帰朝を促す。氏逃れて香港に到る。茲に亦同様の事に逢ひ、一身を隠すに処なく、終に日本の領事公使館なき暹羅に入りたる也。…当時氏[三谷]の名声は在留日本人中に一分の信用もなく」と。宮崎は、広島に移民会社である海外渡航株式会社に雇われ、その代理人として、1895年10月に第2次移民20名を伴ってきた人物である。三谷は鉄道建設工事請負人と工夫供給契約をして、宮崎の監督下にある移民8名を、鉄道工事に勧誘して連れ出した。そのうえ、彼らの月給の半額を手にする保護監督の義務を放棄してバンコクに帰り去ったので、請負業者は三谷との契約を解除し、直接工夫と契約を締結したという。但し、宮崎の三谷糾弾は、自分が責任者として連れてきた移民が、三谷に奪われるという対立関係にあるので、割り引いて理解する必要があるかも知れない。

その三谷も日露戦争後には、自らの病院経営も軌道に乗り始め、日本人社会の名士に転じた。彼は、1913年9月もしくは14年3月に組織された日本人会の初代会長である。

2度に亘る日本人移民事業の失敗

タイへの集団移民は1894年末と1895年10月の2回で、第1次移民は1894年10月前後に岩本千綱が山口県大島郡(周防大島)や那珂郡で募集した32名の農業移民、第2次移民は、広島に移民会社である海外渡航会社が、岩本千綱らの暹羅殖民会社の依頼により熊本県荒尾とその周辺で募集した20名である。

当時の日本に簇生した移民会社は海外の移民受入先を準備した上で、移民希望者が多いと思われる県に目をつけ、その地方の新聞紙等を通じて移民を募集した。移民会社が進出して募集することによって、従来移民者が殆ど存在しなかった県でも、移民が急増した。たとえば、1890年代半ばの移民の出身県は主に、広島、山口、福岡、熊本であったが、その後移民会社が和歌山県や沖縄県で活発な募集を開始し両県の移民者数が急増している。また、移民会社が選んだ受入先がある国への日本人移民数は、当然急増した。例えば、フィリピンやペルー、ブラジルのように。移民会社による移民募集は、一回の募集規模が数百人と大きく、特定地域で行われ、また受入地も特定の国に集中した。

タイでは上記2次に渡る集団移民の失敗のため、それ以後移民会社が関与した集団移民は行われることはなかった。従って集団移民により在タイ邦人が急増することはなく、また、タイに渡航した邦人の出身地

は一ヶ所に集中することなく、全国各地に分散することとなった。

第1次移民の募集は、移民保護規則に違反したものであったが、岩本は当局の渡航阻止を潜り抜けて神戸を出港した。第1次移民団到着後、岩本、石橋らは更に大量の移民募集を企図し、その受け皿として暹羅殖民会社を設立した。

第1次移民団と同時期に写真師磯長海洲(鹿児島県土族、1860—1925)が来タイして開業した。磯長は1880年9月に駒場農学校普通農学科に私費で入学したが、留年となり1年余で退学した。その後、1890年に中国に渡り、日清戦争が始まったのち帰国し、内縁の妻とともにタイに渡って来たのである。彼は1912年頃まで在タイして、この間、バンコクの日本人社会の中心人物の一人であった。

第1次移民団は農業目的であったので7組もの夫婦がおり、年齢も高かった。彼らは、タイでは稲の三期作も可能なので農業で十分な所得が得られるとか、タイの農商務大臣スラサックモンتریから支援を得られるとかいう、岩本の甘言を信じて来タイしたのであるが、実際は灌漑水がなくて耕作もできない乾期の大地に金銭的な支援者もないうままに放り出された。その結果、比較的高い日銭が入る仕事を求め、フランス人がパリで出資者を募って開いたワタッタナー金鉱山会社がプラチンプリー県内外の3ヶ所で経営する鉱山の一つ、ブカヌン金鉱山(現

在コーラート県ワンナムキオ郡タンボン・ワンミー、ター・ワンサイ村)や、丁度建設中のコーラート線鉄道の工夫に転じた。ブカヌン金鉱山は、そこから徒歩2日の範囲内には人家はない、森林の大海中の孤島であり、この金鉱山に行った15名中の10名は95年9月に暹羅殖民会社の石橋らが助けに行った時には、マラリアで既に死亡しており、生き残っていたのは一人の日本人妻と幼子のみであった。その前にバンコクまで帰り着いた4名のうち2名はコレラで死亡した。希望に満ちて来タイした第1次移民団は、1年も経ずに12名が死亡するという悲惨な結末を迎えた。

1895年10月に宮崎滔天が連れてきた第2次移民が、鉄道工夫に勧誘されたことは前述した。最終的に鉄道工夫に就業した人数は15名に達した。しかし、1896年4月初までには、全員がマラリアに罹ってバンコクに戻り、このうち6名が死亡した。まもなく、4—5人の半病人を除けば残りはシンガポールに脱出した(宮崎滔天『三十三年の夢』、国光書房、1902年、97—102頁)。

一方、広島県知事が、1897年12月22日付で外務省通商局長に提出した報告によれば、明治28[1895]年に海外渡航株式会社(本社広島市)が扱った暹羅行きの移民数は男18名、女2名である。(合計20名は第2次移民数と合致する。)翌96年[どの時点かは不明]における、20名の暹羅移民の状況は、男女各1名が帰国、6名が死亡、男7名、

女1名が依然契約中であり、4名は契約を解除した。外地で生きている12名中、5名は既にタイから別の国に転じている(外務省記録3.8.2-85「移民取扱人に依る移民並依らざる移民の員数 各府県知事並に在外領事より報告一件」)。

以上の記録から見て、第1次移民のうち12名がブカヌン金鉱山工夫として働いて死亡、第2次移民のうち6名が鉄道工夫として働いて死亡したことが判る。即ち、第1次、第2次移民の合計死亡者数は18人になる。

ゲンコイの慰霊碑の真実

1928年に23歳の若さで来タイし日高洋行を創立した日高秋雄(としお、1905-1979)のむすめである百合江は、日高秋雄が中心になって日本人会が1966年にサラブリー県のゲンコイ寺に慰霊碑を建設した経緯を、次のように記している。

「それはずいぶん昔のお話しになります。昭和十九年(マ)頃にニューロード近くに面田利兵衛[正しくは面田利平]さんというせんたく屋(マ)さんをしていた人が父を呼び『自分が今まで思っていた事だがとうとう実現出来ずこの事を日高君にたのむ』とこのゲンコイ[ゲンコイ]の山口県人の工夫の方のことを話したそうです。それは山口県人の日本人第一回の移民としてバンコックにて、現在のルンピニー公園の土地でと聞いておりますが、米作をやりましたが失敗し、その当時のドイツ技術師の紹介で

バンコック・コーラート鉄道の建設の工夫として参加しマラリヤと風土病に倒れ皆んな亡くなったこと、その人達のお墓がないということに非常に気にかけていたと面田さんのお話しでありました。父はその当時戦争中でありなかなか表面化させる機会もなく苦慮をして居りましたが、面田さんとはかならずお墓を作って上げましょうと約束したそうです。面田さんはその後すぐに亡くなりました。それから終戦キャンプ生活を余儀なくされ日本へ送還になり、再びバンコックに帰泰し、その当時のバンコックはなかなか大変な様子でした。…世の中も少しは落付いた昭和四十年頃に父はゲンコイの工夫のことを思い出し、約束をはたさなくてはと思ひ色々尋ね人をしました。ゲンコイでなくなった方々のお墓を作ると言っても名前もわからずではと、昭和四十年に日本へ帰国した時、山口・広島・岡山各県の地方新聞・ラジオ・テレビ等へ事情を話し、色々の方々の協力をいただきました。但し父の滞在中は名のり出る人がなくあきらめてバンコックに帰りましたが、しばらくして山口県から自分の曾祖父がバンコックのゲンコイで亡くなったと言ひ、名前は鍛本作造という事がわかり父は非常によろこび、早速過去帳に現在の様[山口県人鍛本作造以下十七名ゲンコイ地区にて工夫として労務中風土病に倒る]に書き替えました。それで風土病やマラリヤで死亡された方々の霊を慰さめるため昭和四十一年十月ゲンコイ市ゲンコイ寺

の住職から許しを得て釈迦像を建立し碑文を彫刻しました。日本人会では五年毎にゲンコイ寺で慰霊祭を行うことにしています。日本人第一回移民の碑文は次の通りである。**日本人第一回移民ノ碑**

日本人第一回シヤム移民山口県人鍛本作造氏外十七名ノ霊此地ゲンコイニ眠ル之等ノ人々ハ一八九四年(明治二十七年)岩本千綱氏引率ノ下ニ日本人最初ノ移民団ニ加ワツテシヤムニ渡リ農務卿スリサク侯ノ後援ヲ得バンコック市ニテ米作ニ従事シタガ事志ト相容レズ時恰モバンコックーコーラート間鉄道敷設に当リタイ国鉄道省ドイツ人技師ノ斡旋ニヨリ之ニ従事シタ稀有ノ難工事ニ加エ未開瘴癘遂ニマラリヤニ冒サレ十八名ガ異郷ニ永眠 之等移民ノ七十年祭ニ本国ヨリ仏像一体ヲ勸請シ碑ヲ建立シテ霊ヲ慰メ以テ其ノ冥福ヲ祈ル
一九六六年三月二十一日 泰国日本人会
この様に父が面田さんとの約束を果したことは、日本人会の方々の一方ならぬ御協力があったからだと思ひます(日高百合江「タイ国日本人納骨堂五十周年に寄せて」、高野山真言宗タイ国開教留学僧の会(会長藤井真水)編『泰国日本人納骨堂建立五十周年記念誌』京都、1987年、41-43頁)。読みづらい文章であるが、意味は把握できる。

日高秋雄は、1938年度と39年度8月まで日本人会の理事長(会長に次ぐポスト)を、また39年度の8月から残余期間、会長を務

め、戦後も日本人会の役員として貢献した。同氏のビジネスについては、『遙かなるメナムの流れ、日高洋行八十年史』(2008年刊)に詳しい。

1971年から79年まで日本人会会長の役にあつた西野順治郎(1917—2001)は、『クルンテープ、タイ国日本人会七〇周年記念特別号』(1984年3月刊)56—58頁で歴代日本人会会長を紹介している。この紹介は、『クルンテープ、タイ国日本人会八〇周年記念特別号』(1993年12月30日刊)13—16頁に直近の10年間分が追加された点を除けば、修正されることなくそのまま再掲されている。残念ながら、本稿で追々指摘するように、戦前部分の会長名、在任時期については完璧からはほど遠い。とにかく、西野は上述会長紹介で、三谷足平初代会長に関して、「三谷足平(医師)大正三年～四年度、明治二十七年にシヤムに渡り、陸軍軍医部長(マ)も勤め、山口県移民団がケンコイ[ゲンコイ]にて倒れた際に治療に馳せつけた等功績大」と書いている。筆者は西野氏の生前にインタビューしたことがある縁で、氏の没後、バンコクの旧宅を訪ねて残された資料を拝見させてもらったことがある。その中に上述の歴代日本人会会長紹介の草稿も見つかった。その草稿には三谷足平について、「明治27年ゲンコイ地区にてコーラツト バンコック間の鉄道建設中の山口県第一回日本移民団18名のマラリヤ発病を聞いて直に水牛の背に乗って治療に馳せ

つけたるも時既に遅く日本婦人1名子供赤子各1名を救助したるのみにて移民団18名死亡せらる(面田利平氏より承る)」と書かれている。西野が初来タイしたのは、自伝(西野順治郎『タイの大地と共に』、日経事業出版社、1996年、298頁)によれば1937年7月24日であり、面田は同年9月6日に死去している。面田から直接聞いたのではなく又聞きだと思われる。

面田利平(1870—1937)は、第1次移民32名中の生き残りの一人で、亡くなるまでバンコクで理髪業を営んだ。面田は、ブカヌン金鉱山で働いて死亡した12名(第1次移民)と鉄道コーラート線建設で死亡した6名(第2次移民)、合計18名について墓もない無念さを日高秋雄等に訴えたものと思われるが、日高も西野も死亡した18名は総て鉄道工夫であったと勘違いしてしまったようである。ブカヌンを探したくとも、ブカヌンの地は、1920年代半ば以降は地図からも消えてどこにあるのかさえも判らなくなっていたのであるから、やむを得ないことかも知れない。上に引用した第一回移民の碑に書かれている、ゲンコイ地区で死亡した山口県人鍛本作造とは、正しくはブカヌン金鉱山で死亡した鍛本信蔵(45歳)のはずである。また、碑にいう第一回移民とは、第1次、第2次移民の両方を含んだものだと解されねば、数が合わない。

フランス領事の日本人保護

1895年半ば第1次日本人移民が、岩本千綱・石橋禹三郎らの暹羅殖民会社との関係を断ち、ブカヌン鉱山を経営するフランスの会社と直接雇用契約をすることにした際、石橋は移民たちがフランスの保護下におかれることをフランス公使に要請した。これを奇貨としてフランスは日本外務省に働きかけ、1895年9月14日よりフランス領事が、在タイ日本人とその利益の保護を担当することとなった。

朝日新聞1895年10月11日号は、この経緯を次のように報じている。

「暹羅在留日本人は本国政府の処置に就き非常に不満を抱き居るもの如し 従来暹羅に在留する日本人は暹羅国法に従ひ之に満足し居りしが追々在留日本人増加し其利害の關係する所重大に至れるを以て領事の管轄を受くるを便宜と考へ居る折柄和蘭総領事の之が委任を受けんと欲する趣を聞き在留日本人は必要の権限を同総領事に与へられんことを本国政府に請願せり 然るに仏人パヴィー氏は仏国の新名誉と勢力を得る好機なりと考へ暹羅鉱山[ブカヌン金鉱山]に於て仏人の配下に属し仏国公使館に於て其約束に調印したる若干の日本人は仏国の保護を受くる者として登録したり 仏国外務省は此通知を得て日本駐劄公使に其運動を為さしめたる結果暹羅在留日本人は九月十四日を以て仏国の保護に置かれたりとの通知を受たり 之を

聞くや在留日本人は実に狂するが如くに激昂し、…暹羅在留日本人の仏国人に対する感情斯くの如くなれば今回仏国の保護の下に置かれたる日本人は会議を開き信任ある適當の本邦人を派遣せらるべきことを日本政府に請願すること及び在留日本人の仏国保護の下に置かれたることを悲み且つ驚嘆する旨の決議案を議決したりといふ」。

フランスは日清戦争後三国干渉で遼東半島の返還を強要し、日本世論の大反発を喰らったばかりであり、加えてタイにも強圧を加えて領土を奪取しつつあり、タイ人の対仏感情も極めて悪かった。

日本外務省の決定は、移民等で増大し始めた在タイ日本人を保護することを重視したためだと思われるが、この決定はタイに日本領事館の設置を求める、在留邦人の声を高めた。

滞日中の岩本千綱の衆議院議員への働きかけもあって、1896年2月29日には衆議院で「我帝国領事館を暹羅国に設置する建議案(山下千代雄君外四名提出)が賛成多数で議決された(『帝国議会 衆議院議事速記録10(第9回議会 上 明治28年)』(東京大学出版会、1979年、416-419頁)。この後、シャムに公使館開設の予算が措置された。

在タイ公使館の開設、政尾藤吉の就任

1897年3月31日に駐シャム弁理公使に任じられた稲垣満次郎は、5月28日にバン

コク着任、オリエンタル・ホテルの一室を仮公使館として開庁した。1898年2月25日、稲垣とテーワウォン外相は16条からなる『日本暹羅修好通商航海条約』および3項からなる『議定書』に調印した

稲垣公使の斡旋により政尾藤吉(1870—1921)がタイ政府に雇用された。彼はイェール大学の法学博士である。当時、タイ国は行政新制度を急造中で、新制度運営の担い手が極端に不足していた。そのため、多分野に渡って多数かつ多国籍の外国人官吏を雇用した。これが、1897年に政尾藤吉や、20世紀に入ってから日本人養蚕技師らが雇用された背景である。しかし、日本人の雇用は、英仏独、デンマーク、アメリカなどと比せば、せいぜい脇役程度であった。

タイ政府に雇用された中堅外国人官吏は、職務上、タイ語能力が不可欠であり、タイ語を習得して長期に働く人が多かった。政尾もタイ語を習得した。政尾は、1902年4月にはバンコク控訴裁判所判事に任じられた。1903年には東大からも法学博士号を授与された。政尾は順調に出世し、1907年初の月給は、司法省の外国人官吏中、ポンドで月給支給を契約した外国人官吏中の第三位で、月額83ポンド余であった。

ラッタナコーシン暦129年(1910/11年)のタイ司法省裁判所職員録によれば、政尾の地位は24名の法律顧問(すべて外国人)中、フランス人のパドゥーに次いで二番目に高く、大審院判事(計7名、外国人は政尾藤

吉とパドゥーの2名のみ)も兼ねている。但し、パドゥーは法律起草委員も兼任しているが、政尾は兼ねていない。政尾の経歴を見ると、彼の仕事は、立法に重点があったのではなく、どちらかと言えば法曹実務家であった。

1911年3月11日には、政尾は6世王からプラヤー・マヒトンマヌーパコーン・ゴーンケンという官爵位を与えられた。父の5世王(チュラーロンコーン王)は外国人官吏にも在タイ華僑商人にも簡単には官爵位を出さなかったが、6世王に代替わりすると乱発気味となり、政尾もその恩恵を受けた一人である。政尾は次の公文のように1913年8月に官職を辞し8月28日にバンコクを離れた。

「公信第58号 大正2年9月2日 在暹
特命全権公使吉田作弥

外務大臣男爵牧野伸顕殿

法学博士政尾藤吉辞職帰朝の件

政尾博士は満十六ヶ年暹羅滞在の処去八月備法律顧問の職を辞し同月二十八日帰朝の途に相就候同人は昨年(マ)上級ピヤ[プラヤー]の称号(勅任待遇)を賜はり出発前には皇帝陛下[6世王]より王冠大綬章を授与せられ又年々巨額の恩給下賜の御沙汰ありたる外皇太后陛下よりは妻子に御物を下賜せられ候次第暹国政府の待遇至て優渥にして当人に於ても満足の至りに存居候 右及報告候敬具」(外務省記録 3.8.4/16-1 「外国官庁に於て本邦人雇入関係雑件 暹国の部」)。

帰国後、政友会代議士に当選した政尾は、

1919年8月には衆議院議員の訪問団の団長としてバンコクを訪問、タイ公使に任じられ1921年3月5日には6世王に信任状を捧呈したが、8月11日に急逝した。在任僅か5ヶ月であった。

前述した西野順治郎の歴代日本人会会長紹介では、政尾は大正5-6[1916-7]年に、三谷初代日本人会会長のあとを襲って第2代会長に就任している。後述するように、政尾は日本人会の前身である日本人倶楽部の会長であった。もし、日本人会創立日は1913年9月1日であることが事実なら、政尾が日本人会の創立会に参加することなく、その僅か3日前にバンコクを離れたのは腑に落ちない。それに、政尾が第2代日本人会会長に就任したという大正5-6年時には、政尾は日本に居り、来タイする機会もなかったが、これで会長就任が本当に可能であったのだろうか。1918年度の日本人会会長は加藤尚三(三井物産)、1919年度の会長は土井節、20年度の会長は水野泰四郎(台湾銀行出張所)、22年度の会長は平佐(ひらさ)幹(台湾銀行出張所)であるが、三谷初代会長以後、1917年度以前までの会長、ひいては日本人会の活動については、今後一層資料の発掘が必要だと思われる。

1890年後半の日本商店

朝日新聞1895年12月8日および12日号に掲載された「暹羅事情」は、在留日本人の職業及び人口を類別した下表を掲載している。

職業	男	女	計
土木家	1	0	1
医師	1	1	2
商家	5	0	5
写真師	1	1	2
書生、壮士、探検者	10	0	10
職工	1	0	1
労働	27	3	30
醜業	3	24	27
計	49	29	78

更に同記事は、日本人商業の現況として、「在留日本人の商業は微々として振はず殆ど有れども無きが如きものなり今試に在留商估の種類を挙ぐれば左の如し」として、日羅商会(大山兼吉の兄大山周蔵ら、既に半休店)、石橋商会(石橋禹三郎、1895年8月開店10月下旬閉店)、桜木商店(山崎喜八郎、大成の可能性あり)、大山商会(大山周蔵、1895年10月開店)、辻商店(短期間で閉店。辻秀五郎の経営と思われる)、磯永写真店(磯長海洲)、洗濯屋(松野恭三郎)、斬髪屋(面田利平)を挙げ、「此他特別商業[醜業]を営む者四戸ありて二店は女主二店は男主なり」と付け加えている。

この後、1895年末阿川太良が再来タイして凶南商会を開いたが、阿川は1900年7月30日に、シンガポールで客死した。また、1896年後半には長崎市の池崎新吉(1855

年生)が来タイし、池崎商店を開いた。池崎家は一家を挙げてバンコクに移り住み、20年近く鼈甲などを販売した。

バンコク日本商品陳列所開設

1899年3月14日、「日暹商会雇船畿内丸(登簿噸数1299)日暹間直航船として石炭二千余噸を」長崎にて搭載しタイのコ・シーチャンに到着した。帰路は、香港にコメを運ぶため、4月16日にタイを出発した。畿内丸は、日本からタイに船を仕立てて貨物を売り込んだ、最初の直航船である。国府寺新作バンコク領事は、4月24日付で、次の報告を本省に送った。

「其碇泊日数一ヶ月に余り本邦解纜より帰着まで二ヶ月半の日子を要す可しと斯る長時日を費やし不勘損失を蒙りしは初回の事とて経験に乏しく諸般の手筈齟齬せしに由る可けれど亦主として本邦出発前予め当国の事情を精査せず且必要なる準備をも為さず到着后遽かに事を辨ぜんとせしに帰因す

右の外近来日暹間航路開始の計画を時々耳にするところなるが航路開始は両国通商上の関係を密接にし将来の貿易発達上大に賀す可きことなれども是れ一大難事業にして慎重精密の考慮を要す若し両国間貿易の現状及将来見込、一般貨物集散の状況、他の汽船会社との関係等を攻究せず漫然空漠たる考を以て之れが開始をなす如きことあらば必然意外の失敗を招き日暹貿

易の進勢に一頓挫を来し反つて之れが発達を阻碍するなきを保し難し現今本邦より当国に輸入せらるる重要品は燐寸雜貨等にして一ヶ年の輸入額五六十万弗に過ぎず然かも一度香港新嘉坡に到り同地の商人より更に再輸出せらるるものにして従来商業の關係直接の取引行はれず(四五の本邦雜貨商は直接商品を取寄せ居れども微々たるものなり)故に勢ひ往航の載貨を他に求めざる可らず石炭は航路開始計画者の第一に着目するものなるが如し若し石炭にして相当の値段にて月々一定の需要あらば航路開始の一困難は除去せられたりと云ふを得べけれど盤谷に於て多数を占むる精米所、鋸木場は粃殻、鋸屑を燃焼し材料を他に仰ぐ必要なく燃料を他より購求する必要あるものは電気鉄道、電灯、鉄道、鉄工所等の数カ所に過ぎず此等も汽罐の構造を粃殻、鋸屑、木片等の燃焼に適應せしめ之れを用ひ居れば本邦炭と前述の燃料と其価大差なきに非れば売行く望なし而して其消費高は一ヶ月合計六七百噸前後なれば一時に多量の石炭を輸入すれば忽ち捌口に困難を生ず現に当地に滞積せられ売口に窮し居るもの昨春三井物産会社香港支店の輸送に係るもの二千噸マクウオルト商会持三千噸他にも多少あれば合計五六千噸の石炭あり更に今回畿内丸にて輸入せし二千噸を加ふれば八千噸に近く殆んど一ヶ年の需要に応ずることを得へん尤も値段を非常に低廉にせば粃殻、鋸屑等を

用ゆるよりも火力の点に於ても取扱の便利なる点に於ても数等優れ居るに由り需要ある可きは確信するところなれども本邦に於て炭価暴落の際は知らず平時に於て態々一艘の汽船を仕立て収益ある可きや疑はし殊に今回畿内丸の例に依ればコー・シー・チアン碇泊所より盤谷迄の運搬費一噸に付き殆んど参弗を要し元価の半以上に当れりと聞くコー・シー・チアン盤谷間は僅かに五十哩に過ぎず而して斯る高運賃を要するとは誰れも遽かに信じ難きことならん然れども諸事不便にして且労働賃金割合に騰き当国の事は単に距離の遠近を以て断ずること能はざるなり」(外務省記録3.6.3-48「船舶雇傭關係雜件 第一卷」)。

直行船を企てた日暹商会とは、九州の炭坑経営者として成功し、当時衆議院議員でもあった山本貴三郎(1846-1899)が、同郷の山崎喜八郎からシャム貿易の利を吹き込まれて、山崎を出し抜いて始めた会社であった。日暹商会は盤谷支店を設け、1899年4月末ごろ高垣尚志(福岡県士族、1853年生)を責任者として派遣してきた。

1899年8月、日本の農商務省は、日本商品の販路拡張のため同年10月にバンコクにも商品見本陳列所を開設し、その事務を日暹商会の山本貴三郎に委嘱することを決めた。実際にバンコクで事務を行うのは代理人の高垣尚志であるが、この決定がバンコクに伝わると、バンコクの日本商人は恐慌を来した。日暹商会が日本政府の商品見本

陳列所を利用して、有利に商売を展開しライバルの日本商店が割を喰う可能性が高いからである。

同年10月17日、在盤谷府日本雜貨及び輸出入商總代と称して、池崎新吉(池崎商会主)、山口友吉(1872年山形県生、1898年2月来タイ商業)、阿川太良(函南商会主)、野崎続太郎(1867年広島県福山生、1896年10月来タイ野崎洋行主)、湯澤良助(1876年長野県生、1897年末来タイ、タイ語学習後99年公使館雇)の5名は連名で、請願書を国府寺代理公使に提出した。その文書に曰く、「商品陳列所は日本商人全体の利用す可きものにして一二の個人の私用に供す可き機関にあらず然るに日暹商会は本国政府より其見本品陳列を托され開設の許可を得しと称し切に運動するもの如し若し日暹商会をして政府の命を享け陳列所設立の意志ありとせば先づ不肖某等と相談ある可きは至当の順序なり然り而して未だ一言の之に及ぶなし是れ不肖某等在盤谷商人を無視して公共の機関を私利に供するものなり 或は新聞紙の伝ふる如く牛莊に於て個人に托せる陳列所ありと雖も他に日本雜貨店を有せざる牛莊と仮令微力ながらも数年基礎を据へたる数戸の雜貨店を有する当府とは大に其趣を異にす」(外務省記録3.3.6-14「本邦商品販路拡張の爲め在外帝国領事館内に商品見本陳列所設置一件」)、と。

そうこうしている間に、99年12月22日に

山本貴三郎は急死した。農商務省は、バンコクの商品見本陳列所を山本貴三郎の相続者、山本太郎(協亜商会主)に引き継がせ、その代理人高垣尚志によって、当初予定より1年遅れて1900年10月に開設された。しかし、次第に參觀者も減少し1903年10月に閉鎖された。

1907年6月になって、田邊熊三郎バンコク領事は、日タイ間の貿易が発達せず、在留日本商人に一人の成功者も出ていない状況を改善するため、農商務省に商品見本陳列所再設の意見具申を行った。この具申には在タイ日本商人の熱心な支持があることを付け加えることも忘れなかった。意見具申書は、在留日本商店の現況の項の中で、「従来当地に於て輸出入業に従事したる本邦商店は其数甚だ少きに非ざるも多くは失敗に了りて未だ成功したるものなく又た現に營業せる者も三井物産会社を除ては亦た甚だ萎靡不振の中に在り」と述べている。しかし、再設予算は認められなかった。

20世紀初頭のバンコクの日本人

アメリカに10年間滞在した経験を有する、現愛知県豊橋市出身の中村直吉(1865-1932)は、無銭旅行で五大州旅行を計画し1901年9月29日に長崎を發って朝鮮(釜山、ソウル)、中国(天津、北京、上海、香港)を経て1902年1月1日にシンガポール着、暹羅に向い1月末にバンコク着。暹羅から再び1902年2月頃シンガポールに

戻り、ここでインドに行くという岩本千綱に遭遇している。

中村はタイで稲垣公使の世話になり、公使館の芝間書記生にバンコクを案内してもらった。中村は、中村直吉・押川春浪編『亜細亞大陸横行』(五大洲探検記、第1巻、博文館、1908年刊)に1902年1月末に訪タイした当時のバンコクの日本人、在留商人について、多分稲垣や芝間などから聞いた話をソースとして次のように書いている。

「当時在暹の日本人は百人足らずで、職業の種類は公使館員、領事官、銜職(かざりしょく)、写真師、画家、医師、理髪師、コーヒー店等で、余り大きい声では言はれないが日本の女郎屋も二軒あつた。此の女郎屋に有名なやりて婆が居るそう。彼女は日本を出てから最(も)う卅年にもなるそう、最初はおさだまりの甘い舌の上へ乗せられて日本を脱出(ぬけい)で上海へ着くと直ぐ売飛ばされ、其後流れ流れて盤谷府へ来たのであるが、人は呼んで上海婆といつて居るそうである」(同書285頁)、「[日本の農商務省の商品陳列所は協和商会[協亜商会]の一隅に設けられてある。陳列の方法は総て米国式で大に意を用いてある処は嬉しかつたが、番人先生[高垣尚志?]の横柄なものには驚くの外はない。あれでは折角陳列所を設けても何にもならぬ。総て士族の商法では駄目だ。今に於て全然前掛(まへかけ)主義に改めないと恐く噬臍(ぜいせい)の悔があるだろう」(286頁)、「暹羅政

府には御傭官吏の必要があるが、西洋人は給料ばかり高くて比較的実績が上らぬ。是に於てどうしても日本の人材が必用だ。恰度国情が日本の維新前に似た処があるが、国王の頭脳は比較的文明的に出来上つて居るから、日本人の活動すべき余地はいくらもあるのだ。然るに在留本邦人は悠々閑々として酒ばかり呑んで居る。酔へば愚にもつかない大言壮語をするか、公使の陰口でもきくのが関の山で実に痛嘆に堪へない。盤谷府の在留商人の中には豪傑連が多くて困る。甚だしきに至つては客が脱帽しないと怒鳴り散らすのさへある。国威の発揚も時と処とに依る。此辺は大に省みて貰いたいものだ。盤谷の人口四十万と見て其過半は支那人である。従つて支那商人の商業的勢力は侮るべからざるものがある。就中日本雑貨は日本商店より支那商店の方が一割方廉価だ。夫(それ)でも日本商店は品物がいいから高価(たか)いのだと思はれて居るだけがつけめだが、注意しないと飛んだ処で豚尾漢(弁髪)の清国人の意)の爲めに背負投を喰うだろう!暹羅は智識と生活の程度が低いから、日本人は極めて仕事が仕易いのだ。処が暹羅へ来た日本人は実力の伴はない癖に大言壮語する。且つ事業の経営に無理をするから半年も経つと倒れてしまう。吾輩が思ふには、海外で事業を押し始めんとする人は第一に其国の国語に熟達して貰いたい。でないと店員に馬鹿にされた上誤魔化される。又金のない癖に外

観を飾つて無闇と紳士を銜う。其上短気で執着力が零ときてるから、どうも失敗する人が多いやうである」(287-288頁)。

中村が描くバンコクの日本商人の通弊は、稲垣公使の持論である。従つて在留商人と稲垣公使の折り合は良くなかつた。しかし、1890年代にバンコクに日本商人が出現して以来、彼らがこのような通弊を有していたことも、また事実であろう。この種の通弊は、日露戦争前後における三井物産の進出や、新世代の日本商人の来タイで大きく改まった。

三井物産のバンコク進出

何人もの日本人会会長を輩出し、日本人会活動を支えることになる三井物産がバンコクに最初の出張員を置いたのは1906(明治39)年のことである。この経緯について、1935年初から三井物産盤谷出張所長を務め、その後出張所の支店への昇格により初代支店長を1938年初まで務めた平野郡司(東京府士族、1890年生)は次のように述べている。

「貿易方面に於て近年迄邦人はあまり発展していなかつた。明治三十七年日露戦争が始まる頃暹羅に武器を売込んだことがある。これが契機となつて明治三十九年に三井物産の出張所[正しくは出張員]が盤谷に創設されたが、これが暹羅に対する貿易の先駆と云つても良い。勿論その以前から小資本の店はあつたけれどもこれは問題にな

らぬ。檀野禮助[長崎県士族、1875年生]氏が当時三井物産出張所[正しくは出張員首席]の創立者で、武器の売込に引続き暹羅大蔵省の銅貨までも日本に注文を寄越して居たが現在は盤谷で鑄造する様になつた。…当時、海軍も川崎造船所へ駆逐艦及び水雷艇を注文建造したが、現在もメナム河に浮んで居る。当時日本と暹羅との関係は日本から仕向ける物として武器、軍需品、暹羅からは暹羅米が目星しいものであつた」(平野郡司『新興暹羅の政治経済事情』南洋経済研究所、1939年、10頁)。

三井物産の在盤谷職員が、三井物産職員録に初出するのは、1906年8月24日現在の職員録であり、新嘉坡支店からの暹羅出張として、檀野禮助、坂部樞三郎の2名の名がある。この2名は、1907年5月15日現在の職員録では、新嘉坡支店に属さない、盤谷出張員として記載されており、檀野が首席である。2名の出張員体制は、1909年まで続き、同年12月1日現在の職員録では、坂部樞三郎1名のみ減少した。1910年8月19日現在の職員録では、坂部は新嘉坡支店に属する盤谷出張員に変更されている。坂部は1911年においても、同職にある。彼がいつ離任したかは不明であるが、1913年8月1日現在の職員録では、新嘉坡支店に属する盤谷出張員は小牧太次郎[1877年鹿兒島生]に変わっており、小牧の名は1915年7月15日現在の職員録まで見いだすことができる。1914年11月1日現在の職

員録では、盤谷出張員は2名に増加しており、小牧が首席である。

出張員が1名のみ減らされた頃から、盤谷での三井物産の商売は低調になったようである。1913年7月に開かれた第二回支店長会議では、盤谷出張員を廃止することも検討されている。この会議の議事録は次のように記している。「盤谷出張員前半季の取扱高は十六万銖にて前々季に比すれば多少の増加を見たり、併し同出張員の最大重要商品たるチーク材の取扱は非常なる減少にして、神戸支店の尽力に依り前半季は漸く少量の取扱を為せしに過ぎず、其他御用商売も失敗の姿にして只幾分発展しつつあるは羽二重、モスリン、綿製品なれども、何分売掛金多く、一ヶ月乃至三ヶ月に亘ること少からず、将来或は同出張員は閉鎖する方得策に非ずやと考慮を費しつつあり、只従来暹羅汽船会社の焚料引合もありたる為め店舗を置くことの必要ありたれども今後は廃止するか、或は今一段御用商売に喰入るの必要ありと考ふ」(三井物産株式会社庶務課『第二回支店長諮問会議事録(四)』127頁)。

1915年7月の第三回支店長会議でも、盤谷出張員を廃止するかどうか議論された。同会では、新嘉坡支店管轄の出張員のうち「盤谷は成績面白からず既に廃止の運命に立至らんとせしも昨年末時局を利用し新規商売をなし得たるを以て一、二期の経過を見て存廃を決すべく今廃止するは其時機に

あらず」(三井物産株式会社文書課『第三回(大正四年)支店長会議事録(其五)』223頁)という意見が出された。

盤谷における三井物産の商売は、第一次世界大戦前は低調であったが、第一次大戦で持ち直した。1917年4月30日現在の出張員は3名、加藤尚三が首席。翌1918年には出張員数は6名に増大した。この人員規模は、1927年1月21日に新嘉坡支店盤谷出張員が、盤谷出張所と改称されるまで続いた。

タイは第一次世界大戦に参戦し、欧州遠征軍を送ったが、遠征軍に三井物産の加藤尚三は三井物産の名で1000パーツ、東京の泰平組合が1000パーツを寄付した(タイ国立公文書館 Ko.To.65.16/18中の1918年1月31日付西公使からテーフウォン外相宛て文書)。

1919年から1923年までの首席は、山本雅一。続く盤谷のトップは、植木房太郎で、彼は1924年から1927年1月21日までは盤谷出張員首席、同日出張所への昇格により1931年までは出張所長の任にあった。植木は日本人会会長として盤谷日本尋常小学校の設立に尽力した。

1926年6月の第九回支店長会議に出席した植木盤谷出張員は、業務の拡大を次のように述べている。「盤谷出張員業務の状況は過去数期に亘り漸次取扱を増加し、大正15年上期[1925年10月-1926年3月]の取扱高675万余円にして、其内容は米、麻袋、

爪哇糖等外国売買450万円、綿糸布、軍需品、米、チーク、雑貨等日本との商売220万円なり。而して最近各商品とも著しく発展し之を数期前の取扱高に比すれば平均倍額以上に増加せる次第なり。尚ほ大正15年上期の当員取扱高を同半期の暹羅全体の貿易額に比すれば4%弱に当る割合なり。」と述べ、続いて主要商品である米、チーク材、官庁相手の武器について詳述している。武器については、盤谷出張員が泰平組合の代理店として暹羅政府に兵器の売り込みをしており、1924年2月には、歩兵銃並に付属品5万挺(350万円)の契約に成功した。商品は25年から28年の間に分割納入の予定である。政府の緊縮財政により官庁相手の商売(御用商売)は打撃を受けていること、また、兵器の売り込みには、デンマーク、英、米からの競争が激しくなったことが報告されている(三井物産株式会社文書課『第九回(大正十五年)支店長会議議事録(第七日)』433-436頁)。

1931年7月に開かれた、三井物産支店長会議において、機械部の成果として、「註文の成立せしものとして顕著なるは暹羅国有鉄道用の橋梁約九百噸あり、之は物産会社として十数年来手掛けたる事なりしも、今回始めて成功せしなり、来月末の船にて積出す予定なるが、先方に荷が着き、品物が良いと云ふ事になれば、更に一千噸の追註文有る筈なり」(『第十回(昭和六年)支店長会議議事録(第四日)』129頁)、と報告された。

1932年から35年初までの出張所長は、大塚俊雄。出張所は1935年9月13日に盤谷支店に昇格した(三井物産株式会社『第52回事業報告書』(昭和10年度下期)119頁)。1935年2月28日から出張所長の任にあった平野郡司が初代支店長に就任し、1938年1月27日に本店参事として転出するまで支店長の任にあった。平野のあとは、高月喜右衛門(1938年1月-39年5月)、高橋泰三(1939年5月-41年4月)、新関八洲太郎(1941年4月-42年9月)の順である。

前出の西野順治郎作成の歴代日本人会長名によると、三井物産のバンコクの長で、日本人会会長を務めた者は、加藤尚三(在任1918-9年)、植木房太郎(同1926-29)、高月喜右衛門(同1939年の2ヶ月)であるが、植木房太郎は1924年から在タイしており、かつ、1926年2月22日の盤谷日本尋常小学校設置について議した日本人会総会を、暹羅国日本人会長植木房太郎として召集しているので、1925年度も日本人会会長であったはずである。

因みに、1926年2月の日本人会総会時の会員名簿によれば、日本人会会員は普通会员57名、地方会員2名である。これは世帯主が会員になっているので59世帯が会員という意味である(外務省記録3.10.2/10-4「在外本邦学校関係雑件、盤谷小学校」)。

日本人会会長名は、今のところ1921、23、24年度は不詳であり、1917年度以前についても、前述のように不在者の政尾藤吉

の会長就任も疑わしいので、上記以外にも三井物産から会長を出している可能性もある。例えば、小牧太次郎は1926年2月時点の会員名簿で日本人会名誉会員であるから、在タイ時の1913-15年に相当の貢献があったものと考えられる。

1932-33年時の日本人会会長であった大谷清一(鳥取県米子出身、1883年生)は、昭和30年代に三木栄からの日本人会会長在職者名の問合せに対し、「御訊の日本人会長在任の事で御座いますが[私が]就任した年月をハッキリ知れ(マ)ません。昭和九年(マ)の天長節には在任し、同年八月帰朝するまで勤めました。一ケ年か一ケ年半位の期間でしたかと存じます。…私しの前は河井為海(三谷医院経営死亡)植木房太郎氏(三井物産)水野泰四郎氏(台銀)平佐輔(マ)(台銀)三井の小牧、山本政市両氏、小川蔵太(三谷医院?)三木栄『山田長正の真の事蹟及三木栄一代記』(私家本、1963年、32-33頁)と答えて、小牧の名を挙げている。

ところで、西野は新関八洲太郎を第21代会長(1943-44)としているが、在職したという時期には、新関は既に転出しており会長を務めることは不可能である。

西野の『クレンテープ、タイ国日本人会七〇周年記念特別号』(1984年3月刊)の記事の誤りに気づいた大谷長三(元大谷洋行主、1901年生)は、1985年8月27日付けで西野に手紙を出し、「私[大谷]は15[1940]

年4月から 15, 16, 17, 18年度と4期連続して理事長を勤めました。15年度は谷[清訓会長]氏と私、16年度は江尻[賢美会長]氏と私、17年度も同一、18年度は森[広三郎会長、1893-1973、1960年東洋レーヨン社長]氏と私のコンビで会の運営に当りました。新関氏と森氏は17年の後半に三井の支店長を交代しておられます。尚 19年度から終戦迄 森[広三郎]・保田英一(三井船舶)のコンビに変わりました。日高秋雄君が亡くなつて現在そちらに居られる方で戦前戦中日本人会の役員をされたのはどなたもいませんので、敢て右の事指摘させていただきました」と述べている。当時の日本人会の組織では、理事長は会長に次ぐポストである。大谷の指摘にも拘わらず、『クレンテープ、タイ国日本人会八〇周年記念特別号』(1993年12月刊)で訂正されることはなかった。

たたき上げの日本商人たち

日露戦争が終わる前後から、三井物産のような大企業の後ろ盾は全くないが、大志と若さにあふれた青年たちが、日本各地からバンコクに進出した。そのなかには商売の基礎を築くことに成功した者もいる。また、日本人医師のバンコクでの開業も増加した。彼らは、第2次大戦期に至るまでの日本社会の中核となった。以下、顕著な数名を挙げて見よう。

1904年5月に現在の滋賀県彦根市八坂から17歳の江畑弥吉(1887年生)が商業

見習の目的で来タイ。彼は1906年に、バンコクのバーンモー地区に江畑洋行を開いた。また農業にも手を伸ばし、1910年までにはランシットで大規模な農業経営を開始し、さらにターチン河口でも農業を行い、農業で成功した最初の日本人となった。彼は豊富なタイ農業の蘊蓄を、日本人会の最初の本格的な出版物、在暹日本人会(代表者平佐幹)編『暹羅之事情』(1922年11月13日発行、東亜印刷株式会社出版部、東京、全646頁)の農業部分の記述に提供している。

なお、平佐(ひらさ)幹は、台湾銀行出張所長であり、1922年度の日本人会会長であった。大著『暹羅之事情』も台湾銀行の金銭的人的な支援により刊行されたものと思われる。なお、台湾銀行は、1919年3月5日に盤谷出張所を開設し、1929年9月2日に閉鎖した(名倉喜作編『台湾銀行四十年誌』1939年)。

台湾銀行初代出張所長は水野泰四郎で、彼は1920年度の日本人会会長である。もし、西野の歴代会長の記録が正しければ、西野が不明とした第5代会長に当たる。

1920年度の日本人会の陣容は次の通りである。

「バンコック日本人会(会員数128名内女29名)会長:水野泰四郎、理事:山口萬吉、木下亨、土井節、横山和十郎、神谷信男、山本雅一、大場忠、磯部美知、土井孫次郎、大槻二雄、大谷静一、書記:柳田亮民」、水野泰四郎の肩書は台湾銀行出張所支配人

(伊藤友治郎『南洋年鑑 1921』、合資会社日南公司南洋調査部、東京、1920年11月発行、67頁)。

ついでに言えば、同じく西野が不明としている第4代会長は、「盤谷日本人会長土井節」(小松茂治編集『椰子の葉陰:林傳君遺文集』、1925年、209頁)の筈であり、彼は1919年度の会長である。そうだとすると、前述した三井物産の加藤尚三は1919年度には日本人会会長ではありえない。

有為の青年たちの話に戻せば、1905年9月に現在の東京都日野市からは、26歳の山口軍蔵(1879年生)が日羅商行暹羅支店詰として来タイしその後山口商店を開いて独立、更に1909年4月には弟の山口萬吉(1886年生)も来タイして兄弟で切り盛りした。

同じく1905年10月には現在の愛知県弥福市から、15歳の伊藤太郎助(1890-1946)が、遊技場手伝[後述の吹矢のことか?]の目的で来タイ。彼は、伊藤洋行を創立し、綿布、雑貨輸入商として大成した。1925年に6世王在位15周年記念ルンピニー博覧会準備のために、ヨマラート内務大臣が召集した外国商人中、日本人は伊藤のみであった。

1907年5月には、現神奈川県平塚市南金目出身の18歳の宮川岩二(1888-1957)が、語学研究農業視察目的で来タイ。彼はタイ語を十分に身につけたのち、大山商会に勤務し、1913年には既に大山商会主となっている。1926年に日本人会が盤谷

日本尋常小学校を設立する際、宮川は会長事務代理として貢献した。

1913年前半、宮川は大山商会主(Nai Hang K.Oyama)として日本企業20社の79種の商標(医薬品、大学目薬、マッチ、ミツワ石鹸、歯磨き、安住伊三郎の商品など)の代理登録申請、および自分の所有する7種の商標の登録申請をしている。この時の申請書の職業欄は、「諸商品の販売および印刷所」とあり、大山商会は印刷所を営んでいることが判る(タイ国立公文書館 Ko To.67.8/20)。

江畑、山口、宮川らは、商店の拡大とともに、従業員には自分の親族や出身地の地縁者を呼寄せた。

1913年前半に日本企業の商標を代理登録申請したのは、宮川岩二、山口軍蔵、三井物産、金澤正次の四人である。山口は仁丹、ライオン歯磨など医薬品、大衆薬を中心に8社の日本企業の25件の商標登録を代理申請している。

金澤正次(1858年生)は、比較的年配であったが、1906年10月に妻及長男禎三(1888年生)を伴って来タイした商人である。

タイにおける日本人の商店は依然少なかったが、日本商品の進出は凄まじく、1910年頃になると、バンコクで発行されていた日刊紙は、タイ語・中国語・英語を問わず、日本商品の広告で溢れている。

1900年頃から10年余年間のタイで、最も成功した日本商人である渡邊知頼(1865年

福岡生、士族)の名を逸することはできない。

渡邊知頼の成功振りは、次の3記事からも窺うことができる。

「暹羅及蘭領諸島は如何:数百年前より日本の交通頻繁で、然かも一向日本人の勢力揚らないのは暹羅である。明治維新後も我が有志の暹羅に眼を投じた者は一、二ではない。すでに今より一七、八年も前[1891年]に、名古屋の野々垣某氏は盤谷府を開いた。然かも忽ち倒れて、一起一仆[仆はたおれるの意]、短きは五、六ヶ月、長きは一、二年、暫らくして閉店するのは、暹羅の日本人商店である。…目下盤谷府に散在して居る日本商店は、山口商店、河野商店、日進商行、江畑商店、大山商店等であるが、独り大山商店は雑貨の外に洋服裁縫等を営んでいる。三井物産出張所を除けば大したのではない。そして今日迄起つたのは随分多く、日暹商会、桜木商店、函南商店、都築商店、協亜商会、中野商店、日暹貿易商会、渡邊商店等随分多いのである。◎暹羅唯一の成功者:唯だ爰に三十八年十二月、驟然[にわか]にして暹羅に入り込んだ渡邊知頼といふ活動写真師がそれである。伊太利人又は仏蘭西人は、渡邊の成績を見て、同じく活動写真を初めたが、群がり来る欧人競争者を蹴散らし蹴飛ばし、暹羅に地盤を築いたのは称揚に値する」(「北はシベリヤより南は南洋に亘る日本商人」、『太平洋』第9巻1号、1909年12月26日号、101頁)。

「暹羅に於ける有望事業:暹羅在住の邦人約百五六十名、外交官と暹羅政府顧問政尾博士を除きては、孰れも金党の勇士にして前途の成功を期待するものに御座候。三井は本年(マ)四月支店を開業したるも、勿論試験時代に属し、他は未だ言ふに足らず。…三年間当国に於ける邦人在留者は僅々五六十名、四五の雑貨店を開けるもの外は、吹矢営業と赤幕ホテル営業を見たるのみに候へしが、日本郵船の盤谷航路を[1906年5月に]開きしより以来、邦人の来航者頗る増加し、毎航一二の同胞を見ざるなき有様に御座候。而して一昨年来活動写真の成功は目覚ましきばかりにて、邦人渡辺某[渡邊知頼]始めて之れを携ひ来り毎月収入約一万銖中六七千銖は純利となり、既に一年以上を経過して益々観客の増加を見るは不思議なる程にて候。暹羅の皇族貴族を始め一般庶民に至るまで日を定めて観覧し、各々其度数の多きを誇りとするを宛かも芝居の常席連の如くにて、近頃貴族事業家中会社組織を以て此業を計画するものあり、今や活動写真は盤谷に於ける一事業たらんとする形勢に候(後略)」(明治四十[1907]年十一月二十六日付、在盤谷三田村八郎氏通信)」「(海外通信:暹羅に於ける有望事業)、『横浜商業会議所月報』第135号、1908年1月25日号、28-30頁)。

上記の引用で、江畑、山口、大山等の商店の評価が低いのは、これらの商店が基礎を固める以前の時期であったからであろう。

更に1911年央の状況について、川上瀧弥は「活動写真は見世物中成功したるもの一つにて、日本人中之にて成功したるは渡邊某なり。其建築は中々立派にて皇族席の設けさへあり。拝受の御紋章まで掲げあり。活動にて此御紋章あるは日本人の電戲館一つの由。各国の電戲館は競争して見物を招く広告甚だ盛なり」(川上瀧弥『椰子の葉陰』六盟館、東京、1915年、42頁)と述べている。

その名を馳せた渡邊知頼ではあるが、経歴は従来不明のままであった。今回、筆者が見つけたところによると次の通りである。

「渡邊知頼君、君は南洋事業家なり、福岡県の人渡邊彦助氏の長男にして、慶應元年十月四日を以て福岡県久留米市京町に生る、明治十六年東京商船学校に入り、二十一年卒業し、翌年聘せられて秋田県中学[秋田県尋常中学]に教鞭を執り、尋で群馬県中学[群馬県尋常中学、前橋高校前身]に転ず、居ること数年にして辞し、三十年一月暹羅に航し盤谷に於て貿易業を開始し、兼ねて活動写真器械及びフィルム販売を営む、三十九年[1906年]より南洋デヨホールに於て護謨樹栽培に従事し二百有余の労働者を使役し商業共に盛況を極めて今日に至れり(牛込区薬王寺町五〇電話番号二五八一)」(古林亀治郎『現代人名辞典』、中央通信社、1912年、ワ16頁)。

渡邊知頼の映画館は、単に映画を上演しただけではなく、日本から何回も旅芸人の

一座や手品師を呼んで興行も行っている。しかし、面識があった三木栄によると、1910年代後半には相場に手を出して財産の多くを失った。渡邊は1926年2月時点で日本人会の8名の名誉会員の一人であるが、それ以降の消息は判らない。

日本人倶楽部、日本人青年会の結成

既に1894年8月26日にバンコクで日暹協会が発足したことを紹介した。日暹協会には、岩本、石橋らの主要メンバーのタイ離れとともに消滅したと考えられる。しかし、日本人の数が増加すれば、相互扶助と親睦、あるいは日タイ交流のために公式もしくは非公式の団体が生まれるのは当然であろう。

1897年7月時点では、磯長海洲と佐々木寿太郎を役員 (Secretaries of the Japanese Club) とする日本人倶楽部が存在しており、スラサックモントリー前農商務大臣は、岩本千綱に預けた刀剣を取り返すために、磯長と佐々木に助力を求めた (外務省記録 4.1.3-144「岩本千綱盤谷船渠会社工夫供給の契約不履行並に暹羅国農商務大臣の装飾委託刀剣入質に付同大臣より取戻方請求一件」)。

1897年の年末年始の在留邦人の会合を、読売新聞1898年2月4日号は「暹羅近信」のタイトルで次のように報じている。「在暹社友より達せし近信の中重(おも)なるもの二三を左に録す

忘年会 旧臘末桜井[桜木]商会楼上に

於て在暹日本人の忘年会を開き頗る盛会なりき尤も当時は公使館員は何か差支へありて一人の出席者を見ず単に居留民一般の忘年会なりき

官民会 居留民の忘年会を催はしてより稲垣公使主人となり篠崎[篠野乙次郎]書記官藤田領事政尾[政尾藤吉]暹羅国外務省顧問官を始とし時田重田の両公使館員及び居留民地桜井[桜木]商会の山崎氏日暹商会の義野氏等を招待して除夜の宴を開かれたり之を公使館内に於ける官民会の嚆矢となす

新年会 二日山崎喜八郎氏宅に於て在留日本人の新年宴会を催ほし先づ磯長氏発起人総代として開会の趣旨を述べ次で稲垣公使の演説ありたり当日は公使始め公使館員悉く及び政尾顧問官等出席して未曾有の盛会なりき」

日暹商会の義野とは、1897年11月16日に旅券下付を受けて来タイしたばかりの兵庫県平民、義野主慎(神戸市出身、1862年生)のことと思われる。

1956年に黄檗宗の大本山萬福寺52代住持に就任した溪道元(別名 溪慊堂、1877-1966)は黄檗宗布教師等の肩書で1905年から1912年まで足掛け8年、ワット・サケートを居として在タイしたことがある。

1935年(昭和10年)7月16日に日本人会が落成式を行った、ワット・リアップの日本人納骨堂の初代堂守に1936年に就任した藤井真水(1932年9月に高野山よりタイに

来てワット・アノンカラムに居していた真言宗の僧侶)は、溪道元管長を訪問した際の会話を次のように記している。

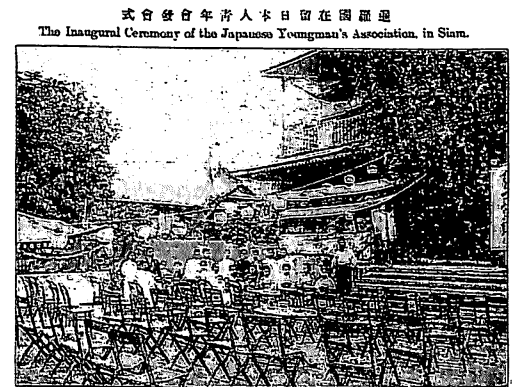
「タイ国に留学された、吾が宗以外の仏教徒としては明治三十八年頃、京都生れの溪道元師がいる(黄檗宗)、師は帰国後、黄檗宗の管長になられた方である。筆者が訪問したときには、九十歳(マ)で、記念に色紙一枚を頂いた。さらに師は、バンコクの日本人会の書記もしていたことがあった由で話が色々とはずんだものであった」(藤井真水「日本人納骨堂建立の概要」、前掲『泰国日本人納骨堂建立 五十周年記念誌』10頁)。

溪道元自身も回顧録(溪道元(黄檗宗管長)『南亜旅行記』私家版、1962年)で、1905年からバンコクのワット・サケートに住み同寺の親日住職に可愛がられてタイ各地の旅に同行させて貰ったこと、磯長海洲から写真術を習得したこと、1912年10月にはバンコクを離れてインドに向かい、同じく黄檗僧でチベット探検家の河口慧海を尋ね、仏跡を巡礼したことなどを記している

ここで問題は、溪道元は1913年9月に日本人会が創立される1年も前に、タイを離れているのに、バンコクで日本人会の書記をしていたと語っていることである。

彼が一時帰国した際に『太陽』編集部写真術の腕前自慢も兼ねて届けたと思われる、自ら撮影した写真が「溪道元君寄贈」として同誌口絵に掲載されているが、その

内の一枚は「暹羅国在留日本人青年会発会式」というキャプションが付されている(『太陽』第13巻8号、1907年6月1日号)。掲載号から見て、暹羅国在留日本人青年会は1907年前半には発足したことは間違いない。溪が日本人会と言っているものは、この青年会を指すのであろうか、1897年に磯長、佐々木らが役員を務めていた日本人倶楽部のことであろうか。あるいは青年会は日本人倶楽部の下に属していたのであろうか。



1907年前後の暹羅国在留日本人青年会発会式
(『太陽』1907年6月号)

この点については、三木栄(群馬県士族、1884-1966)の明確な証言がある。三木は1910年3月に東京美術学校漆工科を卒業した後、同年9月には漆工業改良顧問及同業視察の目的で旅券の下付を受け、翌11年2月15日にタイに到着した。日本人会発足の2年以上前のことである。三木は、『泰国日本人会創立五十周年記念号』(1963年9月発行)に載せた「五十年前の回顧」と題する文章の中で、来タイ当時の話として「当時日本人会の前身、日本人倶楽部は

ブッシュレンの今の小谷亀太郎さんの住宅と思われる所にあった。管理者兼書記は現今宇治黄檗宗大本山万福寺の管長溪道元老師で会長は政尾藤吉博士法律顧問であった」と述べている。

1913年9月以前に日本人倶楽部が存在していたという証拠はこれだけではない。

1911年7月に暹羅を訪問した川上瀧弥(1871—1915、阿寒湖のマリモの発見などでも知られる植物学者)台湾総督府民政部殖産局附属博物館長は、概旭乗(おおむね・きよくじょう、1873—1937)を通訳に雇って各地を旅行した。

川上は1911年央の暹羅の日本人について次のように書いている。

「暹羅国在留の日本人は五十一戸にて男は百三十二人女六十七人計百九十九人ある由なるが、主に盤谷府に住居するものにして、外国人は小舟にて廿四時間に達し得る地域以外には住居することを得ざる定めなり。盤谷府には四十六戸百九十一人(マ)男百二十六人女六十四人、此内台湾人は九戸男十四人含まれ居れり。右の内職業別は官吏二戸七人、政府雇四戸九人、雑貨店六戸三十四人、農業二戸四人なるが、女は遊技場に九人洋酒屋二十人、之は何々ホテルの名を掲げて酒の外に媚を売るものにて、外に洋妾十一人なりとか・・・日本人倶楽部あり、雑誌新聞を備へ、玉台碁盤等遊戯の設備もあり、階上の二室には寢室を備へ会員の宿泊に便せり」(川上瀧弥『椰子の葉

陰』六盟館、東京、1915年、41—42頁)。

川上は滞在中何度も吉田作弥公使の私宴に招かれており、上記の情報源の信頼度は高いと思われる。このように1911年央には、バンコクには間違いなく、政尾藤吉を会長とし、溪道元を書記とする日本人倶楽部が存在していたのである。

また、1912年前後には、日本人墓地の設立のための積立が始まった。日本人会設立後は墓地建設部がおかれたが、最終的には墓地ではなく納骨堂が建設された。日本人会は昭和10(1935)年7月16日に日本人納骨堂落成式及び開眼式を挙行了。日本人納骨堂に関して、三木栄は次のようにうたっている。

「日本人納骨堂、紀念橋、相向ひなるワットリエーツプ 此境内に納骨堂あり、永年の懸案なりし、納骨堂 昭和十年七月に成る、炎熱の国に朽ちても墓もなく 魂魄空に迷ひしなるべし、明治より昭和にかけて同胞の 貴き魂二百を数ふ、大正の元年[1912年]始めて発起して 二十五士丹[サタン]集めしがもと、此金が積み積つて八千[パーツ]に 増へしが為に成りしものなり、零細の金も積ればかくなると 良き教訓を知らしめにけり、汗みどろ椰子の木蔭に果つるとも 魂今は宿る場所あり、彼岸には吾が同胞が集りて 供養を致す習ひなりけり」(三木栄『暹羅名勝歌案内記』(1938年、神戸、3—4頁)。

上述の日本人の親睦娯楽施設であった

日本人倶楽部と日本人墓地建設積立金の会は、日本人会設立後、会の主要活動として引き継がれた。

タイに帰化した二人の日本人、 概旭乗と三木栄

概旭乗は現在の佐賀県みやき町出身で浄土宗の僧侶として、仏教研究のため1898年2月から1905年まで在タイした。1906年2月に再び来タイし、タイ人と結婚しランシットで水田経営を行ったが、2年で失敗した。その後は、タイ語力を生かして日本人の事業経営を手伝った。タイは帰化法を1911年5月18日付けで公布したが、概旭乗は真っ先に帰化申請を出し、同年11月28日付けで許可された。彼はタイの帰化法により帰化した最初の外国人である。戦前にタイに帰化した日本人は、彼の外に、三木栄がいるのみである。

三木は長年、タイの官庁で技術者・教師として勤務したが、昇進は遅く1929年末になってやっとローン・アムマート・トーの文官位を与えられたに過ぎない。これは軍隊の階級で言えば中尉相当である。彼はタイ国への帰化を1935年12月に申請したが、なかなか認められず、タイ籍を得たのは1939年5月末であった。しかも、自由タイ政権側の強制によるものか本人の意思によるものかは不明だが、日本敗戦直後の45年9月15日にはタイ籍を捨て日本籍に戻っている。

本稿はじめの部分で紹介した戦前の日

本人会『会報』掲載の会誌によれば、日本人会は、57名が参加した1937年4月17日(土)の定期総会で会則を改正し、会員は総会で評議員(20名、1年任期)を選出し、評議員が互選により会長、理事長(新設ポスト)、理事(5名)を選ぶという間接選挙方式を導入した。この改正後、評議員会は、会長、理事長、理事が欠けた場合、年度の途中で残任期間を任期として正式の新会長、新理事長等を選ぶことができるようになった。そのため、1年の任期を全うしないどころか数ヶ月足らずの会長が何人も現れた。

三木がタイ国籍を得る前の1938年4月4日(月)に78名が参加して日本人会総会が開催され、20名の評議員が選出された。翌5日の評議員会で会長選挙が行われ、難波勝二(正金銀行)と三木栄が同数を得て、決選投票の結果、難波が会長に決まった。理事長選挙は、決選投票で最高票を得た新田義實(三菱商事初代盤谷出張所長)前理事長が辞退したので、次点の日高秋雄が理事長に決まった。このように役員選挙の結果が割れ、一回の選挙では決まらなかったのは、評議員会の構成が、大手企業の新参社員と古くからの在タイ者からなり、その勢力が拮抗していたことによると考えられる。しかし、38年5月2日には、本店の指示を理由に難波会長が辞任し、評議員会は三木栄を会長に選出した。三木は39年3月末までの残任期間を全うした。

39年4月5日(水)には90名の会員が出席して総会が開催され、評議員が選出された。同日開催された評議員会は、新会長に、高月喜右衛門(三井物産)、理事長に日高秋雄を選出した。しかし、6月26日の評議員会で高月会長は転勤のため辞任し、選挙の結果竹田真昌(大阪商船)が会長に選ばれた。ところが、8月26日の評議員会で竹田会長も転勤のため辞任したので、日高秋雄が会長に選出され、後任の理事長には松尾忠彦が当選した。このように39年度(昭和14年度)は3名の会長、2名の理事長が存在することになった。

40年4月6日(土)に、86名が参加して総会が開かれ、評議員を選出。4月11日の評議員会で、谷清訓(三菱商事)を会長、大谷長三を理事長に選出した。これ以後終戦までの会長、理事長の氏名は、前述した大谷長三の西野宛書簡の通である。

少々、脇道にそれたが、1938年度の11ヶ月間、日本人会会長を務めた三木栄はタイの官庁では出世できなかったが、非凡な知識欲の持ち主であった。とりわけ、タイの美術工芸、江戸時代の日タイ交流史特に山田長政の史実、タイ語、バンコク案内等を中心に1942年までに32冊の図書を出版している(三木栄著『山田長政之事蹟』バンコク、江畑洋行、1943年1月20日発行の第3版に付された「自著泰国に関する出版図書目録(三木栄)」による)。しかも、彼の最初の出版物、三木栄著『盤谷一巡』(発行所 暹羅

国日本人会倶楽部、印刷所 大山商会石版部、1921年8月3日発行)は、筆者の知る限り日本人会による最初の出版物である。更には同書はタイにおける最初の日本語出版物である可能性も高い。同書21頁で、三木は日本人会の場所を次のように書いている。

「サツパトム原野、ワット・ベンチャマ寺院を見終われば、最早、之にて名勝は、一巡したる訳なれば、馬車を駆つて、盤谷郊外の道路を馳駆するも又一興あるべし。到る処の道路皆両側に常緑の樹木を植へたれば、恰かも隧道の如く、涼風面をそぞりて三伏の炎暑を忘れ心機一転して爽快を覚ゆべし。野原中には、大学校(未だ予科のみ)競馬場、赤十字病院、皇族・貴族の邸宅、外人の住居などあり。此郊外通過に約十五分時を費すべし。是より競馬場を左に大学を右に見つつ、スラオング道路に出ずれば左側に牆上高く日の丸の翻り、門上に菊花御紋章を戴ける日本公使館・領事館の前に出ず。数丁[一丁は109メートル]にして日本人会倶楽部也」。



日本人会の初期出版物、
三木栄著『盤谷一巡』(1921年)

日本人倶楽部の日本人会への改編

1913年以前のバンコクに日本人倶楽部が存在していたことは間違いない。次の問題は、日本人倶楽部が、いつ、如何なる理由で日本人会に改編されたかである。いつについては、2説がある。如何なる理由かは、資料がないので推測するしかない。

『クルンテープ、タイ国日本人会七〇周年記念特別号』(1984年3月30日発行)46頁掲載の保科忠治(当時日本人会理事)「日本人会小史」は、「日本人会は、大正三年三月十八日、現在のチャロエン、クルン劇場の裏にあるバンモー・サナム・ナムチューに所在した二階建長家の一軒を事務所とし、初代会長・三谷足平氏を選び、創立された。…(曾我祐知・池田柳太郎氏・談)」と述べている。70周年記念号が3月に発行されていることからして、1984年当時は、日本人会は創立日を1914年3月18日としていたものと

思われる。

ところが、1993年12月30日発行の『クルンテープ、タイ国日本人会八〇周年記念特別号』6頁では、丸子博之日本人会会長が「泰国日本人会は八〇年前大正二年一九一三年九月に設立されました」と述べている。しかし、同80周年号64頁の小谷亀太郎「日本人会創立八〇周年に当たり」では、「初期創立当時の事は古い人の話や古い記念誌に依るものである事了承願いたい。大正三年(一九一四年)三月十八日、今のキャプテンブッシュ・レーンで産声をあげその当時の会員は一五〇~二〇〇人位だったそうである。会長は三谷足平氏であった。別説にチャルンクルン劇場の近くにあったと言われるが定かではない」と書かれている。同一号の中に、日本人会1913年9月創立説と1914年3月18日創立説が並存しているのである。

更に、『クルンテープ、タイ国日本人会九〇周年記念特別号』(2003年12月31日発行)6頁の「タイ国日本人会創立九十周年に当たって」と題した、小野雅司会長の一文は、「大正二(一九一三)年九月一日、初代会長の三谷足平医師はじめ会員約百五十名によって、チャルンクルン劇場の近くにタイ国日本人会が創立されてから」で始まっている。日本人会の創立年月日は、1913年9月1日に固まったように見える。

既に述べて来たように、タイの日本人は1894年8月には日暹協会、1897年7月には

日本人倶楽部を持ち、1913年9月以前にも日本人青年会、日本人倶楽部および日本人墓地建設積立金の会が存在し、これらが改編されて日本人会が生まれたのであるから、日本人会の起源は、1913年9月1日(月)なのか、あるいは1914年3月18日(水)なのかという議論は、あまり重要とは言えないかも知れない。むしろ問われるべきことは、どうして日本人倶楽部を日本人会に改編する必要があったのかであろう。しかし、ここでは一応両説の根拠になっていると思われる資料を紹介しておきたい。

小出武夫編『在南洋邦人団体便覧』(南洋協会、昭和12[1937]年6月25日発行)は凡例で、「本書は在南同胞活動の一斑を知らんが為め、昨昭和十一年八月末南洋各地日本人会に対し、該地邦人諸団体の陣容其他に関する概括的の通報を求めし処、各地日本人会は欣然応諾続々之を通知し来りしを以て、汎く内外同胞の参考に資するため、之をよく整理按配して一冊のパンフレットを作成した次第である」と述べ、暹羅国日本人会が1937年2月27日に提供した資料を同書114頁に以下のように掲載している。

暹羅国日本人会 昭和12年2月27日現在
所在地 No.2278 Soi Sab, Suriwongse Road, Bangkok, Siam

目的及事業 会員相互の親睦と邦人福祉の擁護増進を図り邦人子弟の教育を行ひ且日暹の親善と同胞の発展を期す

会員数 一百四十五名
創立年月日 大正三年三月十八日
役員名 会長 鈴木宇治(暹羅燐寸工場長) 副会長 日高秋雄(日高洋行主)
理事 新田義實(三菱商事出張所長)、大谷長三(大谷洋行主)、武居芳郎(細田貿易株式会社支店長)、磯部鉦蔵(三井物産支店社員)、三木栄(暹羅国政府官吏)、井内忠三(東洋綿花出張員)、新野芳四郎(歯科医)、太田齊一(医師)、岡崎竹次郎(三井物産社員)

これから、1937年2月時点の日本人会はその創立日を、大正3[1914]年3月18日とする資料を南洋協会に提出したことが判る。

一方、1913年9月1日説の最古の根拠と思われるのは、外務省記録K.3.7.0.11「在外本邦人諸団体調査関係一件」第三巻中に保存されている、1931年11月5日付の矢田部公使の下記公信143号である。

公第143号、昭和6年11月5日、在暹羅国特命全権公使矢田部保吉

外務大臣男爵幣原喜重郎殿

「在外本邦人諸団体調査方の件」

本件に関し本年10月5日付通三普通合第1165号貴信を以て御来示の趣敬承、依て別記の通り査報申進す。御査閲相成度し

追て、本件に関する調査事項中の第11項各種団体の事業活動等に対する在外公館としての考察及同第12項団体の指導啓発其他に関する事項は機密扱として別信にて報告のことに致したるに付為念申添ふ

調査事項

- 1, 名称 暹羅国日本人会 (The Siamese Japanese Association)
- 2, 所在地 事務所所在地は暹羅国盤谷市シーピヤ路646号 (No.646, Sri Phya Road., Bangkok city, Siam)
- 3, 目的 会員相互の親睦を図り福利を増進し同胞互助の機関たるを目的とす。
- 4, 組織 会員を以て組織す。会員は暹羅国に在留する日本人に限ることとし暹羅国駐荷帝国公使を以て名誉会頭に推戴し会長、幹事及書記の役員及、職員を置く
- 5, 創立年月日 大正2年9月1日
- 6, 現任会長名及其の任期
会長 河井為海 任期一カ年(昭和7年3月31日満了)
- 7, 幹事(現任)名及其の任期
大谷清一、宮川岩二、江尻武司、有延憲一、三木繁[栄]、溝上政憲、塩田厚、田中廣四、金澤禎三、日高秋雄、以上10名
任期 1カ年(昭和7年3月31日満了)
- 8, 会員数 77名
- 9, 活動の範囲(事業)並に業績
本会の事業として 1、倶楽部 2、共済部、3、墓地建設部、4、学務部の機関を設く
倶楽部には、(イ)図書の備付及閲覧に関する設備 (ロ)運動及娯楽の設備を為し
共済部にては会員相互の救恤弔慰の目的を達する為め
(1)会員又は其の家族の疾病災難に罹りたるものを慰問又は救恤し其の死亡したると

きは之を弔問し

(2)縁者なき会員死亡したるときは其の葬儀を為す

墓地建設部にては将来盤谷に於て日本人共同墓地建設の準備を為し

学務部にては盤谷日本尋常小学校を経営す。

本会の業績としては即ち大正2年9月本会設立以来現在に至る迄の間、共済部に於て会員及其の家族並に縁者なき会員の疾病災難に罹りたるものを救恤したること65人(此の支出高1217銖[パーツ]60士丹[サタン])、又死亡者の弔慰67回(此の支出高1125銖80士丹)に及べり。又大正12年の母国大震災に際し同年10月4日之が慰問の為め本会基金の内より暹貨1716銖75士丹を支出送金したり。其他暹羅国皇帝の慶弔に際し在留邦人の敬意を表することに常に努め居れり。

本会経営に係る小学校は大正15年6月開設以来卒業生を出すこと男子3名にして現在生徒30名を有す。開設年度より本年度に至る迄に於ける其総支出額は2万4292銖75士丹なり。

10, 維持方法(所有財産並に基金の有無を含む)

会員より毎月応分の会費(最低額2銖以上)を徴する外有志者の寄付金等を以て本会を維持す

(a)所有財産

日本人倶楽部に備付する撞球台2台、付属品4つ玉5組の外什器として椅子70脚、大皿60枚、小皿110枚を有するのみにして日本人会の家屋、土地は借用のものに属す。

(b)基金額総計暹貨8196銖6士丹也(昭和6年10月末現在)其利息収入は毎年小学校經常費に充当す。基本金の内訳左の如し、

1, 基本金 5717銖56士丹

2, 学務部基金 2478銖50士丹

以上

その後、昭和9(1934)年1月25日付で宮崎申郎在盤谷領事が大臣に提出した「在外本邦人諸団体調査の件」では、日本人会の所在地は、暹羅国盤谷市サノン[タノン]、ソイサツプ、スリウオン路第2278号と変わっているが、創立年月日は 大正2年9月1日のままである。その他には、次のような内容である。即ち、

組織 会員を以て組織す。会員は暹羅国に在留する日本人(台湾人、朝鮮人を含む)とし暹羅国駐劄帝国公使を以て名誉会頭に推戴し会長、理事及書記の役員及職員を置く
会長名及其の任期 大谷清一 任期一年(昭和9年3月31日満了)

理事名及其の任期、宮川岩二、鈴木宇治、藤井又一、有延憲一、磯部鉦蔵、新野芳四郎、日高秋雄 以上7名 任期一年(昭和9年3月31日満了)

会員数 97名

日本人会創立を1913年9月1日と明記し

た1931年の矢田部公使の報告も34年の宮崎領事の報告も、当時の日本人会からの聴取によるものと思われる。現に1931年度の日本人会会長河井為海は、1935年6月に「在留民の唯一の公共団体として日本人会が大正二年[1913年]から出来て居りました」と講演の中で語っている(河井為海「暹羅事情」、台湾総督官房調査課『南洋事情講演集』1935年所収、71頁)。即ち、日本人会は1930年代前半は、創立日を1913年9月1日と公使館に答え、1937年2月には1914年3月18日と南洋協会の問合せに答えているのである。上記矢田部・宮崎報告の創立日1913年9月1日が、石井米雄・吉川利治『日・タイ交流六〇〇年史』(1987年)で紹介されたため、日本人会は同書の記述を信頼して、創立日を1913年9月1日に改めたのかもしれない。

しかし、両説ともに、出所はもともと1930年代の日本人会である。しかも、古い方が常に正しいとは限らない。日本人会の職員は、当初1913年9月1日と理解していたが、創立に参加した人に聴取して確かめたところ、1914年3月18日の方が正しいことが判り、のちになって修正した可能性もあり得るからである。1930年代は創立から20年程度しか経っておらず、まだ記憶力のよい創立参加者が多数生存していたはずである。例えば、1914年3月18日創立日説を採る、上述の保科忠治「日本人会小史」のソースの一人は、曾我祐知(1893-1984)である。曾

我は、宮川岩二と同郷で宮川が経営する大山商会で働くために満18歳9ヶ月の1912年7月に来タイしている。それ故、日本人会創立にも参加した筈であり、彼の証言には具体性があるように思われる。

この議論に決着をつけるには、創立時の公使館報告、新聞報道あるいはタイ政府への届出記録などを探すしかない。しかし、筆者がこれまで探した限りでは上記のどの資料も存在していないのである。何とも不思議な話ではある。

明治28[1895]年以来明治大正を通して、日本の在外公館は管轄地域内で日本人団体が結成された場合は本省に報告した。それをファイルしたものが、外務省記録3.8.2-213「在外各地日本人会関係雑件」として東京の外交史料館に保存されている。このファイル中にはアメリカや中国の各地で作られた多数の日本人会の報告とともに、1915年9月12日の新嘉坡日本人会設立、1920年の香港やヤンゴンの日本人会設立についての報告も含まれている。ところが、タイにおける日本人会の成立や活動についての報告は一切見当たらない。タイにおける日本人会は公使館と没交渉のまま生まれたのであろうか。

筆者は、日刊紙バンコク・タイムズや検索可能な日本語の日刊紙に日本人会についての報道はないものかと1913-14年時のものを調べたが、何一つ見つからなかった。

一層、不可解なのは、日本人会の設立許

可に伴う登録の公示がタイ官報上に見つからないことである。タイ政府は1914年5月29日に協会(サマーコム)法を施行し、同法により営利活動以外の活動をする目的を有する、既存もしくは将来設立される全ての団体は、規約を作成して登録するために、内務省に提出し、その許可を得る義務が課された。タイ語でサマーソン(倶楽部)と称していた団体もこの対象であった。規約には、①協会名、②設立目的、③協会本部所在地、④会員の加入退会に関する規程、⑤協会の執行役員に関する規程(会長制であるとか理事會制であるとか)の定めを要した。また、規約改正および執行役員の交替の場合は15日以内に届けることを要した。この法に違反した場合は、執行役員のみならず会員にまで重い罰金が課された。

協会法施行後、様々な既存もしくは新設の団体が登録申請を行い、許可された場合はタイ官報で公示された。しかし、日本人会については、この登録の公示が見当たらないのである。よくあることだが、官報発行者がミスで落としてしまった可能性もある。筆者は丁寧に探したつもりだが、見落とすか、あるいは調べた官報には、掲載された部分の頁が偶々欠落していたことも無いわけではないが。

登録申請とは別に、協会法は役職者の交替も届出を要求しているので、一年ごとに役職者が替わることが多い日本人会の届出は相当数に上ったであろう。協会法に基づく

届出のオリジナルは警察局に最近まで保管されていたというが、現在は大部分が廃棄されており見る事ができないようだ。

ともあれ、協会法施行時に既に存在していた日本人倶楽部が、同法の規定に従い規約を作成し、許可申請を行ったことは間違いないはずである。日本人倶楽部は、協会法の施行を契機として同法の要求する規約内容の作成を迫られ、総会を開催して日本人会に衣替えしたという推測が可能である。これが、日本人倶楽部が日本人会に改編された理由として最も蓋然性の高いものと考えられる。もし、そうであれば、日本人会の創立日は、協会法施行日に近い1914年3月18日の方が分がありそうである。

最後に、本稿で紹介したものも含めて、判る範囲で戦前の日本人会の会員数を記しておきたい。1920年(128人)、1926年2月(普通会员57、地方会員2)、1931年11月(77名)、34年1月(97名)、36年3月(正会員125、地方会員11)、37年2月(145名)、40年10月(正会員255、地方会員38、特別会員8)。このうち、36年3月の出所は日本人会『会報』第7号、40年10月は、同『会報』11号である。これらの数字および創立時の在タイ日本人数から見て、創立時の会員が150～200人というのは少し大き過ぎる感がある。

以上、本稿は現在の手持ち資料の範囲で、戦前の日本人会の謎の部分に迫ってみた。はじめで述べたように、戦前の日本人会に関する資料は圧倒的に不足している。もし、

資料をお持ちの方があれば日本人会事務局もしくは筆者(メール:murashim@waseda.jp)までご一報頂ければ、真に有り難い。

参考資料

第1表 大正14年(1925年)中在暹羅日本人員数(出身県別)並に日本への送金額

県名	男(人)	女(人)	合計	送金の有無
熊本	3	13	16	送金1人(其他銀行為替によるもの1500円)
広島	8	6	14	なし
愛知	5	4	9	なし
静岡	6	3	9	なし
佐賀	5	3	8	
東京	4	4	8	
神奈川	6	0	6	
京都	4	1	5	三井銀行為替によるもの600円、 其他銀行為替によるもの2352円、合計2952円
山形	4	0	4	送金(其他の銀行為替によるもの)400円
山口	4	0	4	
滋賀	2	1	3	
鹿児島	1	1	2	
島根	1	1	2	
千葉	2	0	2	
長崎	1	1	2	送金(外国郵便為替)300円
三重	1	1	2	
富山	1	0	1	
兵庫	1	0	1	
計	59	39	98	

(出所:外務省記録3-8-2-317「在外本邦人送金調査表」より筆者作成)

第2表 タイ人口センサス(1937年5月23日実施)
県別国籍別男女別人口集計で日本国籍者が居住する県と人数

県名	男女合計	男	女
バンコク	408	270	138
チョンブリー	8	6	2
ナコンパトム	2	2	0
チェンマイ	15	10	5
プラー	5	2	3
ナコンラーチャシマー	8	8	0
ウボン	3	2	1
スラートターニー	4	1	3
ナコンシータマラート	10	4	6
ブーケット	8	5	3
ソクラー	7	3	4
ヤラー	4	2	2
パッターニー	3	2	1
ナラティワート	16	12	4
合計	501	329	172

(出所:仏暦2480年全国人口センサス報告書第二巻(タイ語)、47-74頁より筆者作成)
なお、同一センサスの国籍別全国人口表では日本国籍者は、514名(男339名、女175名)となっており、第2表の県別日本国籍者の合計と一致していない。

タイと共に歩んで

泰国日本人会百年史

発行日 : 2013年9月

編集人 : 100年史編集委員会

発行人 : 大橋 寅治郎

発行所 : 泰国日本人会

1st Floor, Sathorn Thani Bldg. II

92/2 North Sathorn Rd. Bangrak, Bangkok 10500

Tel. 0-2236-1201(代) Fax. 0-2236-1131

Web : www.jat.or.th E-mail : info@jat.or.th

印刷・製本 : アベノ印刷株式会社